ルーマニア語名詞の格融合と性転換について

大阪外国語大学　伊　藤　太　吾

1.1　本稿では，俗ラテン語から現代ルーマニア語に至る過程において名詞の格変化がどの様に融合したかという事と性の分類がどの様に整理統合され新たな結果を生成するに至ったかを考察したい。

1.2　ラテン語の名詞は，その表す意味に従って，animate なるものと inanimate なるものに分けて考えられ，一般の話者にもその様な認識がゆきわたっていたと考えられる。印欧祖語時代の文化水準の低い頃から，自然界の具体的事象は，animate なるもの対 inanimate なるもの，更に後になり，male 対 famale の如き二元対立的にとらえられていたのであるが，その様な傾向が俗ラテン語の時代にも依然強くあったと考えられる。そして，animate なるものの中に male 対 female の対立が生ずると今度はほぼ inanimate ＝ neutral という概念が派生したと考えられる。これは勿論ラテン語以前の段階の話であるが，ロマンス語の生成時にも同じ様な現象は起らなかったであろうか。animate なるもの対 inanimate なるものという如き二元対立は，male 対 female の二元的対立に吸収されてゆくのが多くのロマンス語の歴史であるが，果してルーマニア語の場合はどうであろうか。“二元的対立”という点にも気を配って考えてみたい。

1.3　さて，格融合に関してであるが，第一変化女性単数名詞の主格を示す－Aが，俗ラテン語の時代からしばしば，対格の－A（M）と混同されていた事は周知の通りである。そして，呼格はそれ以前に主格に編入されていた。主格と対格との混同・融合に関しては，次の四つの大きな原因が考えられる。

a）animate なるもの，特に人間の場合，行為者と被行為者は対称的にとらえられていたとは言え，利害関係が表裏一体であるが故に尚更混同され得た。inanimate なるもの＝中性においては主格＝対格であるのはこの理由による。

b）実際の文章においては，主格はくり返えされる率が少いが，対格の場合は主格の場合と同様代名詞になる事もあるとは言え，当然頻度が高くなり，その結果，対格が主語（格）として用いられる様になり，混同が生じ，更に後，主格に吸収される様になった。

c）一定の有意味的発話連鎖の直接の下部単位として音節境界をとらえた場合，音節尾位にある聴覚印象の度合の弱い－Mは，特に後続する単語が子音で始まる場合は，開音節を特徴とするラテン語の音節構造に適さない為に消失するという特殊な事情があった。これは，SUMの－MやAMATの－Tが消失したとほぼ同じ理由である。又，－P，－T，－K，－B，－D，－Gなどの閉鎖音が音節尾位に来にくいのと同じ理由でもある。①

d）時期を同じくして前置詞が発達し，その頻度が増し，格変化の必要性が無くなった，つまり，分析的傾向が強くなった。

これら四つの理由は，各自独立して作用したのではなく，相互に依存した結果であり，どの理由が一番重要であるかは決定できないし，又その必要も無いが，Väänänen によれば，②この主格と対格の混同の初出年代は紀元前百年前後であり，Pompei の碑文では一段と頻度が増し，メロヴィング朝の文書では複数の－AEは－ASに殆んど全く取って代られていると言う。

1.4　1.3 d)で述べた前置詞との関連において斜格の融合について述べよう。まず，主格（対格）の－A（M）と長さのみが異る奪格の－$\bar{A}$であるが，音声学的見地からすると，1.3 c）で述べた事とも関連があるが，音節尾位にある為に長さの識別が不明確になったといえる。次に，奪格は同伴，作為，場所，離奪等異る多くの意味を表す事ができたのであるが，ラテン語の分析的傾向が強まるに従い，CUM，DE，IN，AB，EX等の前置詞無しには用いられ得なくなった。そして，その時期が前置詞の発達の時期と同じだった事が拍車をかけた。Ciceroにも前置詞＋奪格は多く見られるのである。前置詞の中には対格と奪格の二つの格を支配して静止と運動を区別して表すIN，SUB，SUPERの如きものがあった事と，対格を支配する前置詞の方が奪格を支配する前置詞よりも数的に多く，その結果当然対格の使用頻度が高くなった事から奪格は対格に同化された，と言うよりもむしろ，吸収されてしまった。与格と属格は－AEという共通の語尾を有していたが，発音はおそらく－aε＞－ε＞－$\theta\theta$＞－θに近かったと思われる。この様に見て来た場合，主格を含めて全ての格が俗ラテン語の話者の意識として，－Aになったと言えよう。勿論，－AEが－Aと書かれた文書が存在するという意味では無い。そして，意味論的見地からすれば特にanimateなるものを考慮する時，与格と属格との関係は，支配者としての主格と被支配者としての対格との関係に似ていると言える。つまり，α)CASA REGINAEと言えば，女王の所有物つまり所有者としての女王が主格的であるわけだが，例えばβ)REGINAE EST AMARE なる文と比較した場合，CASAはAMAREとともに主語（格）であり，α）のREGINAEは与格としてとらえられる素地があったと理解できそうである。勿論，α）のREGINAEを本来の与格とは誰も呼ばない。そして，本来の与格はADという前置詞を介して対格に吸収されていった。その様な例は現代語に多く残っている。Bourcieziによれば，③ ラテン語の時代にもTERRA AD ILLO HOMINE，ANCILLA AD ILLO HOMINEの様な例が見られるという。歴史はくり返えされると言われるが，与格と属格の意味上の融合は現代語でも行われている。現代スペイン語ではser（＜ESSE）以外の動詞とともに与格が属格の役割を果している。例えば，Me lavo la cara = I wash my face. Me limpio los dientes = I brush up my teeth. であり，決して※Lavo mi cara。※Limpio mis dientesとは言わない。又当のルーマニア語においても，Să-mi arat ştiinţa（= subjunctive marker＋me show the knowledge.）となり意味はLet me show my knowledge。である。同様に，Să-ţi faci lecţiile = Do your lessons。Să ne punem cărţile pe masa = Let us put our books on the table。となる。Lausbergによれば，④古フランス語には，la chambre à son père という例があり，古プロヴァンス語には，filha es al rei という例があり，南イタリアの方言にも，a chi é la figlia？ é figlia a Tizio などのAD＋対格の例があるという。現代フランス語でもcafé au lait は同じ構造である。因に，スペイン語ではcafé con leche，ルーマニア語ではcafea cu lapteと言うが，CUMは奪格支配の前置詞だったのであり，ここでも奪格と与格と属格の混同融合が認められる。尚，現代スペイン語で「バラの香り」と言う時el olor a rosaと言うのが正しいとされているが，このaは起源的にはABであるが，属格的・与格的意味を含んだ対格のADと解することもできそうである。Native speaker も分離のABとDEを区別し難いとみえてel olor de rosaと言う人もいる。このdeは現代スペイン語では属

格としてとらえられる場合が多いことからしても，混同から起った斜格の融合の度合が俗ラテン語時代にいかに強かったかがうかがえる。

1.5 この様にして斜格が融合した結果，対格が全斜格の代表格となる。そして，対格は前置詞を介して従来の属格・与格・対格・奪格の全斜格を包含する事になった。その結果，animate なるものの動作主・行為者としての主格と被行為者としての斜格の二元的屈折が生じる事になったのが西ロマンス語世界における初期の段階であり，フランス語ではこの二元対立が比較的遅くまで残るのである。しかし，イベリア半島ではこの二元的対立が姿を現した例しは殆んど無い。つまり，対格が主格をも含めた全ての格の代表格となったのである。

1.6 それに反して，ダーキアでは異った型での二元対立が生成し，それが現代ルーマニア語に認められる。即ち，主格・対格融合格と与格・属格融合格の二元的対立である。主格と対格は西ロマニアの場合と同様音形的には対格の－Mの消失により同形となる。例：CASA＞casă＜CASA(M)，CAPRA＞capră＜CAPRA(M)。ただし，－Aが yod に後続する場合，音韻変化が生じて－A＞－e の如く－Aは yod に同化して一段階狭くなる。例：VINEA＞vie，FOLIA＞foaie，FAMILIA＞familie。しかし，与格及び属格の－AEは種々の音韻変化を蒙る結果となった。例：MENSAE＞mese，STELLAE＞stele，AQUAE＞ape，CAPRAE＞capre，CASAE＞case の如く＜－AE＞－e が一番普通の様であるが，－Aの場合と同様に yod 及びその他の口蓋音に－e（＜－AE）が後続する場合は一段階狭くなって－i になる。例：FOLIAE＞foi，VA(C)CAE＞vaci，VIRGAE＞vergi。だから，現代ルーマニア語の第一変化名詞の主格・対格（base form）と属格・与格（case form）の二元的対立は，他のロマンス語の場合と同様に，音韻変化の結果と格相互間の意味的類似性をはじめとする分析的結果生成したものと言えよう。

この様に，ルーマニア語の音韻変化を考察するに際して，語基が口蓋音であるか否かの区別を立てた方が良い。今，CAPRAとVA(C)CAをそれぞれ無条件音韻変化（つまり，語基子音が非口蓋音である事を指す）と口蓋音韻変化の代表としよう。そうすると図Ⅰの様になる。

格 ＼ 俗ラテン語主格形	CAPRA	VA(C)CA
base form	capră	vacă
case form	capre	vacă

図 Ⅰ

この格の融合に対して，バルカン半島のスラヴ語特にブルガリア語の影響説がある。ブルガリア語の場合は呼格と対格との対立であり，ラテン語の第一変化名詞において主格と呼格が同一変化語尾を有するからといって呼格と主格の本質とが同じとは言えないが，そして，呼格は他の格とは別格であり格というより句と呼ぶ方がふさわしいという意見もあるが，ブルガリア語の影響も南スラヴ族の移住混住の歴史を考えると否定し去る事はできない。しかし，あくまでもラテン語の内的原因，つまり，音韻変化の結果からなる屈折語尾の中和化とそれを可能にした格そのものに対する意識の変革及び分析的傾向の結果が根

本原因であろう。

1.7. さて，第一変化名詞の複数形は，前述の如く，西ロマニアでは－ＡＳ（対格）が全ての格の代表格となるという事は定説であるが，東ロマニアのイタリア語やルーマニア語に関しては少し複雑で，定説とはなっていない様である。イタリア語に関しては，－ＡＥ＞－e説と－ＡＳ＞※－ａｉ＞－ｅ説，つまり，それぞれ主格説と対格説とが対立しているが，筆者は後者の意見である。Lansberg によれば，⑤ 東西ロマニアの境界点の一つとされているSpeziaでは，「それらの美しい山羊」のことを la bela crava と言うらしいが，この例は明らかに対格の直接の変異形であるという事を示している。Spezia でのこの例は，1.3 c）で言及した筆者の音節境界理論に従えば，音節末尾にあるという条件で－Ｓはゼロになったのである。その上，西ロマニアでは単数の場合も複数の場合も対格から派生しているのに，東ロマニアでは主格から派生しなければならない様な特殊な理由は存在しなかったと筆者は考える。だから，単数の場合と同様，主格と対格の融合をさまたげる障害は存在しなかった。そして capre という base formが生成した。しかし，case form の生成過程はどうであろうか。古典ラテン語では属格は－ＡＲＵＭ，与・奪格は－ＩＳである。しかるに，現代ルーマニア語の複数の case formは実は base formと同じく capre である。古典ラテン語の屈折は，前述の如く，前置詞の発達にともなう分析的傾向で，不明確になった。しかも，頻度からして，属格よりも与格，奪格の生き残る率が高い。それに，属格の消失する以前の段階ですでに単数の場合と同様，対格を除く全斜格の融合化が進んでいたと考えられるところから，case formは－ＩＳに統一されるに至った。しかし，－ＩＳの－Ｓは消失して－ｉとなり，これが更にアクセントの無い尾位にあることから，－ｅに成ったと考えられる。ＣＡＰＲＡＥを例にとれば，その複数与・奪格はCAPRIＳであるが，それが※ｃａｐｒｉ＞ｃａｐｒｅ（＝※ｃａｐｒａｉ＜ＣＡＰＲＡＳ）という事になる。図示すれば図Ⅱの如くなる。

単数 ｃａｓｅ　ｆｏｒｍ ＝ 複数 ｂａｓｅ　ｆｏｒｍ ＝ 複数 ｃａｓｅ　ｆｏｒｍ

図　Ⅱ

この様に，第一変化名詞の格融合は，ＣＡＳＡとＶＡ(Ｃ)ＣＡを例にとれば，大略図Ⅲの様になろう。

図ⅢのＣＡＳＡＥは無条件音韻変化の場合の複数の例であるが，単数の場合に語基が口蓋音で終るＶＡＣＡ型の特殊な変化があった如く，複数の場合も環境が同じ場合口蓋化が見られる。ＶＡＣＡＲＵＭからvaci が直接派生する事は音韻変化的には無理であるが，図Ⅱの構図が既に出来上っていた為に複数の共通格として vaci が用いられておかしくない。

格＼言語	俗ラテン語	現代ルーマニア語		俗ラテン語	現代ルーマニア語
主格	CASA VACA	casă vacă	base	CASAE VACAE	case vaci
対格	CASAM VACAM	casă vacă	form	CASAE VACAE	case vaci
属格	CASAE VACAE	case vaci		CASARUM VACARUM	case vaci
与格	CASAE VACAE	case vaci	case form	CASIS VACIS	case vaci
奪格	CASA VACA	case vaci		CASIS VACIS	case vaci

図 III

2.1 現代ルーマニア語には，第一（女性），第二（男性），第三（中性）の三種類の変化があるという風に，主としてルーマニア人の学者によって言われているが，これは定冠詞を後置しない単数主格，正確には単数 base form を基準にしている。A.R.S.R.によれば，⑥ 第一変化の分類に入る単語の単数 base form の語尾は，①－a，②－e，③－ea，④アクセントのあるa，⑤口蓋子音，の五例であり，母音の－i で終る zi と 半母音の－i で終る joi が例外である。実例を図IVで示そう。

性格＼俗ラテン語主格形	①イCASA □ANIMA	②イCARTA □FLOS	③イSTELLA □MAXILLA	④イBASMA □PARA	⑤イLUNIS □MARTIS	例イDISE 外□IOVIS
単数 base form	casă inimă	carte floare	stea măsea	basma para	luni marti	zi joi
単数 case form	casă inimă	cărți flori	stele măsele	basmale parale	luni marti	zile joi
複数 base form	case inime	cărți flori	stele măsele	basmale parale	luni marti	zile joi
複数 case form	case inime	cărți flori	stele măsele	basmale parale	luni marti	zile joi

図 IV

（N.B. BASMAとPARAはラテン語でなくトルコ語に由来する。）

図IVの例 stea，măsea のラテン語はそれぞれSTELLA，MAXILLA であるが，base form では －ELLA，－ILLAが消失し，case formでは再生している

為に奇異に感じられるが，元々は存在していたものである。他に例をあげると，sa＜SELLA，cățea＜CATELLA，ea＜ILLA，madua＜MEDULLA などがある。－LL－がアクセントのない－Aの前では消失するのがルーマニア語の規則変化である。

2.2　ルーマニア語の第一変化に属する名詞は，papă，pașă，popă，tată，vlădică などの男性名詞及びToma，Mina，Costea，Petrică などの人名の固有名詞を除き全て女性である。ラテン語でもAGRICOLA，NAUTA，POETA，COLLEGA，SCRIBAなどは第一変化に属していても男性名詞であったのと同じであるが，第一変化の中に編入されているラテン語の名詞は大略次の通りである。

a) ラテン語の第一変化つまり女性名詞の大部分を受け継いでいるのは言うまでもない。CAPRA，CASA，STELLAがそれぞれcapră，casă，stea となる事は前述の通りである。

b) ラテン語では第二変化の中性名詞－UMの複数は－Aであった。この語尾－Aが第一変化の女性名詞の語尾－Aと同じ事から，－UMの複数－Aが女性単数名詞となったものが多い。その様な名詞が，殆んど全てのロマンス語に共通していることであるが，集合名詞的意味を有しているのは，その起源からして当然だ。

c) 意味的には元々女性であった単語がその音形をより女性的にする例がある。

イ) FRONS，FRONDEM＞frunză，GLANS，GLANDEM＞ghindă

ロ) NURUS，NURUM＞nora，MANUS，MANU＞mînă

ハ) FACIES，FACIEM＞față，DIE，DIEM＞zi

d) 男女二性しか無い現代スペイン語では，中性のMAREがel mar でも la mar でもあり，特に十六世紀頃までは所属が明確でなかったことからもうかがえる様に，全ロマニアにわたってラテン語の中性名詞の行方に関しては微妙な差異がある。上に述べた如き音形的理由に基づく場合と意味的理由・類推に基づく場合とがあるが，ここでは後者の例をあげれば，MAREは，țară＜TERRA，apă＜AQVAなどの概念上の対比においてルーマニア語では女性になったと考えられる。

e) 三性の区分が明確であったラテン語の均衡が破れて殆んどの地域で男女二性の新しい対立になると，男性であったものが女性になり，その反対に女性であったものが男性になるという現象が認められる。現象のとらえ方の歴史的差が言語に現れている様に思われる。今はルーマニア語での女性名詞を扱っているのではあるが，反対の流れ，つまり，女性から男性への性転換の例をもあげると，ARBORは女性であったが，現代ロマンス諸語の中でも女性であり続けるのはサルヂニア語とポルトガル語だけであり，ルーマニア語はarbor，スペイン語はárbol，フランス語やカタロニア語ではarbreという形態をとり男性名詞である。この理由として考えられるのは，音形的理由もさることゟ，非神話的世界への転換あるいは言霊的世界からの脱皮の結果と考えられよう。樹木は妖精（NYMPHA）が宿り果実を産す故に女性名詞だった。それが新しい世界観のもとで男性になったのである。

f) 反対に男性から女性になったものにはPONTE＞punte，FLORE＞floare⑦がある。スペイン語でもflorは女性である。これも自然界における女性的なるものの再編成の結果である。ラテン語自体の歴史の中でもその様な編成し直しの現象は認められる。しかし，ラテン語の場合は神話化への移行であり，今我々がルーマニア語の段階で問題にし

ているのは脱神話化である点が異るが，そのラテン語の神話化の例として，ＦＲＯＮＴＥ，ＦＯＮＴＥをあげることができる。古典ラテン語では男性であったものが後期ラテン語では女性になり，それが今日まで女性のまま残っているのである。但し，ＦＯＮＴＥはルーマニア詞には根跡をとどめていない。

g) ＣＡＬＯＲＥ＞ căldră，ＣＯＬＯＲＥ＞ culoace にも見られる如く－ＯＲＥは中抽概念を表す男性名詞であったが，ルーマニア語では女性であり，スペイン語でも中世を通じて性は浮動的であった。しかし，スペイン語の場合と同一範疇で論じるわけにはいかない側面もある。つまり，定冠詞との関係であるが，スペイン語では定冠詞は名詞に前置されるに対してルーマニア語では後置されるから，ルーマニア語では問題にならないのであるが，スペイン語では現代でも el　hablaの如く，女性名詞であるにもかかわらず，アクセントを有するａという母音が頭位にある単語は好音の関係で，本来男性に使う冠詞と同じ形の冠詞（はっきり男性定冠詞と言って良いかも知れない）を使う為だと筆者は考えるのであるが，単数の定冠詞は hablaの如き有アクセントのａで始まる女性の単語に限らず，el と la を固定できなかった。これが原因で名詞自体の性も浮動的になる傾向が少しくあった。

3.1　ルーマニア語の第二変化に入る単語の単数 base　form　の語尾は次の様である。①非口蓋子音　②口蓋子音　③－ｕ　④半母音のｕ　⑤半母音のｉ　⑥－ｅで，以上の他に極めて稀に－á，－ｅａ，　－ａがある。これらの単数・複数における二つの対立する格の変化形を示すと図Ｖの如くなる。

俗ラテン語 / 数 / 主格形 / 格	①イANNUS ▫HOMO	②イOCULUS ▫AVUNCIRUS	③イSOCER ▫ASTRUM	④イFILIUS ▫ LEO	⑤イPULLUS ▫TILIA	⑥イ REX ▫FRATER
単　数 base form	an om	ochi unchi	socru astru	fiu leu	pui tei	rege frate
単　数 case form	an om	ochi unchi	socru astru	fiu leu	pui tei	rege frate
複　数 base form	ani oameni	ochi unchi	socri aș̦tri	fii lei	pui tei	regi frați
複　数 case form	ani oameni	ochi unchi	socri aș̦tri	fii lei	pui tei	regi frați

図　Ｖ

3.2　まず図Ｖのうち何よりも目につく事は，これらの語尾がラテン語の第二変化の男性名詞のそれに準拠している事である。④イのＦＩＬＩＵＳが比較的判り良いのでこれを例にとると，対格はＦＩＬＩＵＭであり，女性名詞に関して前に述べたと同じ理由で主格と対格は容易に融合した。そして，与格・奪格は－Ｏであるが，それが－Ｕになった音声学的理由は二つ考えられる。一つは，語末母音という環境での中和現象が起きたという事。あ

との一つは，と言っても前の現象と独立してはいないのであるが，与格と奪格の二つの前置詞格が対格の－uに順応した為であろう。a＞eと同様o＞uとなるのは語尾では普通の現象であり，前述の如く，対格は全ての斜格の中で一番頻度が高く，その頻度の高い形に順応する事はどの言語においても当然の事である。④のＦＩＬＩＵＳの－ＬＩ－は極端な湿音化の結果消失してしまった。③のＡＳＴＲＵＭ（＞astru）は第二変化の中性名詞であるが，殆んど男性名詞と同じ変化をする為に，男性名詞の部類に編入されてしまった。その様な純音韻的理由に基づく例も多い。⑤のＰＵＬＬＵＳは，－ＬＬ－が口蓋化音となる素地があった為に※pulleum 又は※pullium の過程を経て－ｌｌ－が湿音と化して※puiu となり，－uは－ｉ－に吸収されて全体はpui となった。②のＯＣＵＬＵＳはAppendix Probi に見られるＯＣ'ＬＵＭの過程を経て※〔okiu〕＞ochi となったと筆者は考える。⑤も②もいずれも子音の湿音化による一見例外と思える現象ではあるが，規則正しい音韻変化に従っている事は言うまでも無い。⑥のregeはＲＥＸという主格からでなく，ＲＥＧＥ(Ｍ)＞regeの如く対格からである事を証明する好例である。①のomは明らかにＨＯＭＯという主格形からであり対格説とは矛盾する様ではあるが，その表す意味が人間であるというところからして，目的語となるよりも主語となる事が多く，又心理的にも主格を保存したいという意識が働いた為ではなかろうか。このＨＯＭＯに似た例は第三変化のimparisyllabicなものが多い。例：ＳＥＲＰＥＮＳ＞ṣarpe cf．acc．ＳＥＲＰＥＮＴＥ(Ｍ)＞※ṣerpinte，ＤＲＡＣＯ＞drac，ＣＵＬＭＥＮ＞culme，ＨＯＳＰＥＳ＞oaspe etc．これらの例はＣＵＬＭＥＮを除いて全て生物であり，文章の主体となる事が多かった故に主格の形が保たれているのであろう。尚，もしSERPENSの対格から派生していれば※ṣerpinte となっていたであろうから明らかに主格からの派生である事を示す為に例示した。ＨＯＭＯにしろＲＥＸにしろラテン語の第三変化の男性名詞は，第二変化の中性名詞とともに，第二変化の男性名詞に吸収されたと言える。それは音韻形態的理由に寄る場合が多い。

3.3　これらの男性名詞の複数形成法を見てみると，図Ｖで判る如く，単数の場合と同様に，ラテン語の第二変化に属す男性名詞の複数形成法に準拠していると言える。ＤＯＭＩＮＵＳを例にとると，複数の主格はＤＯＭＩＮＩであり対格はＤＯＭＩＮＯＳであり，現代ルーマニア語のdomnの複数はdomniである所から，主格から派生した形態の様に思えるかも知れないが，筆者は第一変化の女性名詞の場合と同様に対格からの派生形態だと考える。Lausbergによれば，⑧Helmet Lüdtkeは Lucaniaで －OS からの派生と思われる－Ｏの示複数語尾としての存在を認めていると言う。筆者も，もし主格からのみ派生したのであれば，Lucaniaでは－Ｏとなる事は不可能だと思う。同様に，従来主格からのみ派生したと考えられて来た東ロマニアに属すルーマニア語でも対格からの派生という事が十分に考えられる。1.7で－aの複数形の－eは対格からの派生である事を述べたが，その第一変化名詞のみが対格から派生するというのは納得できない事である。それに，－Ｓは音節尾位にある為に母音化したものと考えられる。同じ様なＳの母音化の例はＤＯＳ＞doi，NOS＞noi，VOS＞voi etc．に見られ，－ＯＳ＞※－oi＞※－ii＞－iという過程をたどったものと思われる。その際に主格の－Ｉが類推力として働いたかも知れない。と言うのは，総合語における格の区分は分析語（では実は格とは言わないが）における程明確でないから。因に，古典ラテン語の主格の－Ｉは－Ｏ－という語基母音を含んだ－ＯＩという形態であったものが－ＩＩ＞－Ｉとなったのであるという事実を想い浮かべれば，

決して突発的な説明不可能な音韻変化では無い。一度起った音韻変化が後世又くり返えされるという事は，子音の口蓋化現象を見れば判る。ロマンス諸語に現在認められる子音の口蓋化現象は，印欧祖語の時代から数えれば，実に三回目なのである。

ところで，case formはラテン語の与格・奪格から大きく逸脱していない。DOMINIS などの－ＩＳが与格・奪格に共通した屈折語尾であるが，－Ｓが消失した形で残存しているものと思われる。ラテン語の第三変化の imparisyllabic なものでも，屈折語尾は第二変化の男性名詞の複数形成法に順応した。この結果，ルーマニア語の第二変化の男性複数においては，base form と case form の区別は無くなった。

3.4　図Ｖの①om－oameni の例から推測される如く，語尾が非口蓋子音の単語は複数形成に際し，a) その子音に i を後続させる事によって口蓋化させるか，b) d＞z，t＞ţ，k＞č，g＞ǧ，s＞ş の変化の上に更に i を添加するかの二通りの方法がある。a) の部類に入る語末子音は b) に列記した物以外全ての子音の可能性がある。いずれの場合も i は純粋な母音ではなく，yod であると理解できる。

a) の例：　an－ani，lup－lupi，moş－moşi，pom－pomi，rob－robi，soţ－soţi

b) の例：　agud－aguzi，bărbat－bărbaţi，berbec－berbeci，fag－fagi，grumaz－grumaji

a) に属す子音＋ea の場合は，図Ｖの⑥ rege－regi の如く－e→－i の母音交替だけで子音に影響は無い。b) に属す子音＋e の場合も複数形成に際し，－e は－i になり子音は口蓋化する。語尾が母音の場合は，c) と d) の二つの方法がある。c) は－e の場合，d) は－a の場合で，－a を－i に代え，上の b) に属す子音は同様に変質する。

c) の例：　frate－fraţi，munte－munţi

d) の例：　papă－papi，tată－taţi，vlădică－vlădici

以上の a)，b)，c)，d) の例で判る通り，ルーマニア語の男性複数の屈折語尾は口蓋音が特徴的である。この現象は他のロマンス語には殆んど無い。この様な音声的特徴に関して南スラヴ語の影響を全く否定するわけにはいかない。その結果，ルーマニア語の音節構造は閉音節的な印象が強くなる。

女性名詞から男性名詞になったものの例については，2.3 e) でも述べたが，ルーマニア語の男性名詞はラテン語の第二，第三，第四変化の男性名詞の殆んどと中性名詞を含んでいる。

4.1　現代ルーマニア語の第三変化に属す名詞は中性であると言われている。その単数 base form の語尾は，①非口蓋子音，②口蓋子音，③－u，④半母音の u，⑤半母音の i，⑥－e，の六種類で，男性名詞の場合と全く同じである。これらの実例を図Ⅵで示そう。

俗ラテン語主格形 / 数格	①イTEMPUS ロLOCUS	②イANGULUS ロAVUNCULUS	③イTITULUS ロLUCRUM	④イRIUS ロSTUDIUM	⑤イCUCUILUS ロPALEA	⑥イSPATHA ロNOMEN
単数 base form	timp loc	unghi unchi	titlu lucru	rîu studiu	cucui pai	spate nume
単数 case form	timp loc	unghi unchi	titlu lucru	rîu studiu	cucui pai	spate nume
複数 base form	timpuri locuri	unghiuri unchiuri	titluri lucruri	rîuri studii	cucuie paie	spate nume
複数 case form	timpuri locuri	unghiuri unchiuri	titluri lucruri	rîuri studii	cucuie paie	spate nume

図 VI

この図の中に入れてないものの外に，－o，－i 及ばアクセントを有するuで終るもの，例えば，radio－radiouri，rugbi－rugbiuri，tabu－tabuuri などがあるが，数も少く例外的な存在である。

図VIの例は一見雑然とした配列になっているが，男性名詞の場合と同様，単数においても複数においてもbase formと case form の区別が無い事が何よりもまず特徴的であり，示複数形態素が－e，－i，－uri の三種類にも及ぶ，いわば寄せ集め的，あるいは吹きだまり的な性が中性であると言えよう。

4.2　ラテン語では第二変化に男性と中性が共存し，それらの変化の差は，単数においては主格と呼格でしかなかった。しかし，中性名詞に多い inanimate なるものを呼格で呼ぶ必要は無いわけで，実際は主格＝呼格となり，更に又，inanimate なるものが主語になる率が低く，対格が男性名詞と同じ形態の－UMである事から，後期俗ラテン語の早い時期から混同が生じた。複数においては，主・呼・対の三つの格の上で差異がある事にはなっているが，実質上は上に述べた単数の場合と同じく，中性名詞に多い inanimate なるものを呼格で呼ぶ必要も無く，inanimate なるものが主語となる率も薄れたが，今度は単数の場合と異り，対格は男性－OSと中性－Aという形態上の明確な差があった上に，意味上も前述の如く，中性複数が集合名詞的意義を有す女性単数名詞として新たに再出発した事からも，中性名詞そのものが新たな所への編入を余儀なくされた。ラテン語の中性名詞に例えばVERBUMがあるが，この単語は単数のままではルーマニア語には残存していなく，VERBA即ち複数からの形が音韻変化を蒙り乍らvorbă として保たれ，性は女性と成っている。この種の例は多い。

4.3　図VIには六種類の語尾があるわけだが，図ではそれぞれの具体的な単語に対応する俗ラテン語を示してあるので，ラテン語での性及び第何変化に属していたかを見よう。⑤のPALEAや⑥のSPATHA及び上で述べたVERBAに類する例の様な例外もあるが，現代ルーマニア語の中性名詞の大部分はラテン語の第二・第三変化に属す男性・中性名詞である。単数に関してであるが，主に考えられる理由は，第二変化に属す男性名詞と中性

名詞の区別は主格語尾の－Ｓと－Ｍの差だけであり，しかも上述の如く，主格から派生する現代語の単語が稀である所からも判る様に，男性・中性の区別はできなくなっていたので，男性⟷中性への再編成が容易に行われた。現代語の第二変化つまり男性名詞について3.2で述べたのだが，中性から男性への移行がその様に行われたと同じく，男性から中性への編入も，こと音韻面のみを考えた場合，とても容易であった。問題は，男性的なものと中性的なるものをいかなる意味的原理で識別していたかという事である。中性の複数形態は寄せ集め的要素が強いわけであるが，消極的に言えば，男性的でも無く女性的でも無いものの寄せ集め的性であると言えるし，積極的側面として，ラテン語の性の概念の変革の結果生じた新しいルーマニア語的中性とも考えられる。つまり，今までにも増して無生物の性として中性が考えられる様に成ったと言えよう。現象把握能力の向上の結果，生物対非生物の概念が独立して存在する必要が再び生じたのであろう。

4.4　中性複数の語尾－ｅ，－ｉ，－uri にはそれぞれ複雑な起源がある。まず－ｅは a) 中性複数主・対格の－Ａが規則的に音韻変化した結果からも得られるし，b) ＮＯＭＥＮの－Ｎが脱落した結果残ったものもあるし，c) ＰＡＬＥＡの複数ＰＡＬＥＩＳの－l(Ｓ)＞－ｅの結果でもある。しかし，a) の－Ａ＞－ｅが古くから女性と考えられていた事から，－ｅは女性語尾の借用という事が言える。－ｉは，図Ⅵの②の例からも判る通り，男性複数語尾の借用である。－uri はラテン語の第三変化の中性名詞の示複数尾－ＯＲＡの音韻変化の結果である。同時に，第二変化の中性複数属格が－ＯＲＵＭである事も現代語の case formが－uri と成るのに寄与しているであろう。－ＯＲＡ＞※－ure ＞－uri という変化をしたと思われる。

この中性には語尾が－ｅに成る可能性があるものであれば，ラテン語の男性も女性も，編入され得た。例：ＭＯＮＳ，ＭＯＮＴＥＮ(m) ＞munte，ＡＵＲＩＣＵＬＡＭ＞ureche，ＡＲＡＮＥＡＭ＞rîie etc.

5.1　大部分のロマンス語の歴史は，ラテン語の中性名詞の消失の歴史であると言えるが，ルーマニア語はその中にあって中性が存在するという意味合において特異な地位にある。ここで「ラテン語の中性」と「ルーマニア語の中性」と言ったが，実はラテン語の方は語源通りneutral（＜ＮＥ　ＵＴＥＲ）つまり男性でも女性でも無い独立した性という意味で中性が認められるが，「ルーマニア語の中性」と言う術語はラテン語のそれと同じ意味では使えないという事は今までの論述で明らかだと思う。単数の屈折は男性であり乍ら複数の屈折は女性という極めて特異な形態をとる為に，「両性名詞」（フランス語では，noms ambigénes）と呼んだ方が本当は正しい。それに，名詞を修飾する形容詞には，ラテン語の様に中性と言う範疇が無いから尚更「中性名詞」よりも「両性名詞」の方が良いという事になる。しかし，ルーマニア人の学者は殆んど全員「中性」の存在を主張している。それはローマの血筋を引く民族である事を誇りに思うナショナリズムの表れなのである。

Florica Llimitrescu によれば，⑨Al. Graur はルーマニア語の中性はスラヴ語からの借用であると言う。Meyer Lübke はラテン語からの継続であると言い，Gabinski はアルバニア語からの借用であると言い，Al. Rosetti は再編生の結果自力で再生したものと言っていると言う。筆者の意見はAl. Rosetti の考えに近いが，Graur やGabinski の意見も傾聴に価する。

両性名詞の単数base form の語尾は男性名詞の単数base form の語尾と同じく，

非口蓋子音，口蓋子音，－u，－u̯，－i̯，－eの六種類である事はそれぞれの図式で既に述べた。そして，女性名詞の単数 base formの語尾は，－ă，－e，－ea，－á，口蓋子音の五つであった。その結果，女性名詞と男性名詞（＝両性名詞）の単数語尾に関する共通点は，－eと口蓋子音の二つと成るのであるが，これらはともに例が少くて女性と男性（＝両性）とが混同される可能性が無くなり，再編成は音韻的面を考えれば果された事になる。そして，示複数語尾も両者は異るから，機能は十分果せるわけである。極めて大ざっぱに言えば，他のロマンス諸語はこの段階でとどまっていると言えよう。複数の場合は，古典ラテン説においてさえ，女性主格と対格はそれぞれ－AEと－ASであり，中性の主・対格は－A，－ORAなどでともに－Aという語尾母音を有していたから，これらが－AE＞※－ai＞－e，－AS＞※－ai＞－e，－A＞－e，－ORA＞－uri の如き正常な音韻変化以後も依然として形態的に類似点を共有する事から，ルーマニア語の両性名詞の複数形態は女性名詞の複数形態を取る事になったと筆者は考える。

結論として，格融合の原理として考えられるのは，音韻変化の結果語尾が不明確になり，同時に前置詞が発達して言語が分析的に成り，元々存在していた格相互間の意味的類似性が浮彫りにされ格に対する意識が変化した事であり，性転換の原理として考えられるのは，やはり音韻変化の結果従来の性の特徴を音形的に示し切れ無くなり，脱神話化も含めて現象把握能力の向上の結果より二元的に，（つまり，男性と女性及び生物と非生物→男性・女性・非生物（文法的には両性））事象をとらえる様に成ったと筆者は思う。その背後には勿論，基層語の問題，ローマ化の年代とその程度，バルカンの風土等いろいろと問題はあるが，今回は特に，格融合と性転換に共通して見られる原理は音韻変化であり，両者は互に独立して発生し得た現象では無いと言う事を強調したい。

〔注〕

① 詳しくは，拙論「イスパニア語の音節構造と分綴法について」大阪外大学報３０号，大阪，１９７３年.

② Introducción al latin vulgar, Madird, １９７１年.

③ Élément de linguistique romane, Paris, １９６７年.

④ Lingüística románica, Madrid, １９６６年.

⑤ Idem.

⑥ Academia Republicii Socialiste Romanica, Gramatica limbii romane, Bucureşti, 1966年.

⑦ 以下特にことわらない場合は俗ラテン語の対格形を記す。－Mは省略する。

⑧ Lingüística románica, Madrid, 1966年。

⑨ Introducere in morfosintaxa istorică a limbii române, Bucureşti, １９７４年.

【英文の要約】

A note on the gender-change and the case-confluence of Romanian Nouns

by Taigo Ito

This paper intends to make clear the relation between the change of the three genders and the confluence of the five cases of Vulgar Latin. The three principal reasons why the five cases confluenced into two in Romanian are: the non-clarity of the desinences resulting from phonetic changes, the analytic inclination of the language according to the development of prepositions, and the semantic conformity already admitted in Latin. As the mechanism concerning to the gender-change, we have noticed the following two main reasons: the phonetic change and the alternation of the faculty to observe the phenomena.

As to the relation between the gender-change and the case-confluence, we can conclude that there exists a very close relationship and that both of them could not occur chronologically independently nor without the phonetic change, namely the phonetic change decides the orientation of the phenomena.